芦高新聞

発行所
芦屋市宮川町
兵庫県立
芦屋高等学校出版部

前途へ幸多かれ

五二〇名（男子三三二名　女子一八八名）の三年生は一昨日二月二十六日をもつて高校生活に終止符をうち、第八回生として巣立つていく。

すなわち、昭和二十七年の春四月、眞新しい白線に、芦の葉の校章に希望を抱いて校門をくゞつて以来硬式野球部の全國制覇、台風十三号による講堂の被害、社會的には講和條約による日本の獨立など、校内的にも校外的にも最も事件の多い三年間を過して來た。それだけにその三年間に得たそれぞれの体験は獨特の校風と共により意義深いものに違いない。これら貴重な体験を生かし、よりよい社會人として各々の部門で正しい社會を作る事に努力される様期待して止まない。

祝
御卒業
芦高自治会

人間愛を培え
卒業生を送るに際して
学校長　飯野三峯

三ケ年の学園生活をおえて、おのがじし別れ行く諸君に対し、その前途を祝福すると共に、これからの生涯を強く正しく明るく生きぬいてくれるよう祈りつゝ、老婆心ながら次の言葉をおくる。

一、自らを規制する工夫

諸君の芦高生活は、大体において自治的な生活であつたと云えるだろうし、我々もなるべくこれを害わず、育てることに努めて来た積りである。しかし高校生としての成長段階においては、自治だとか自主だとか云つても、まだ父母や学校からの助言や制約がある程度あつたし、また君等としても一面反撥しつゝも、これに依存する傾向がなかつたとは云えない。ところがこれからはそうした制約力は殆どなくなつてしもう。世評と云つたような社会一般の影響力はあるかも知れぬが身近なものとしては自ら進んで親友の忠告に聞くか、こちらから接近した尊敬すべき教授の影響力に頼る外ない。しかしそれとても取捨の判断は、全く諸君の自由意志に委される。従つて多くの場合諸君の常識により、自ら判断し規制して行かねばならぬ。ところがその常識と云うものが往々にして身勝手なものであるから、諸君はよく気をつけて、あくまでも真心に裏付けられた良識を働かせ甘く見くびつてはならない、人間は常識的で平凡なことをやる時ほど、不真面目で無責任になり勝ちなものである。諸君は先ず自らの良識と努力とにより、自らをきびしく規制して行く心組を育てねばならない。

これから諸君の身辺には、いろ〳〵な人が接近することだろう。君子型、デカダン型、楽天型、慷慨型。中には戦前一部に見られたような、神がかり的な押しつけがましいせん動的言動に狂奔する指導者や、いやに利口振つた冷淡な傍観的批判者があつたりするが、いずれも望ましい民主社会の建設者として、正しいあり方ではないと思う。そうした場合諸君としては、それを機縁として物事の真相を正視し、それを手掛りとして心境を練りあげることに努めてもらいたい。そうしてじつくりと落着いて少しも軽はずみなところのないまた力んだ節もない辛棒強い生き方を見つけてもらいたい。そうすることがすぐには役立たなくても後日大きく正しく役立つことになるのであるこの意味は多数のかげにかくれて良心を眠らせ、安易な生活を選べと云うことではない深い人間愛に根を下したおだやかな、しかも辛棒強い生き方の工夫なのである。名を求めず、ひたすら実を挙げることに心をくだくような人々が多く出てくれなければ、日本の明るい社会は出来ないと思うのである。

二、研究は愉悦の体得にまで

学者が研究に精根を打ちこみ、詩人が創作に苦吟する姿は、はた目にはとても苦しく見て居られないものがあるかも知れないが、彼等としてはそれを苦しみとして感じないか、或は苦しみとして受取りつゝも、そこに止むにやまれぬ生命の愉悦を感ずるのではあるまいか。我々はそれ程の境地に達し得ないとしても、何か精根を打ちこむ対象を持つて居る時、云い知れぬ充実感を覚える。諸君が大学において、職場において、自分の心を打ちこむ研究の対象を持たぬことは不幸である。しかもそれは与えられるものでなく自ら求めるものである。かくしてひと度この愉悦を体得する時、それは諸君の生命の糧となり、生活の中核となつて諸君を大きく育てあげるだろう。

三、人間愛を培え

家庭や社会が愛情の交流を失う時、それは何と索漠としたものになることだろ。私は現在の社会がいかにトゲ〳〵しくギス〳〵した、思いやりに結ばれて居ないかを思つて悲しむものである。

社会の基盤を培うものは愛情である。人間愛に根ささぬ行為は人に受け取られない。人間愛の深さが思索を深め実践の強さにつながる。愛に根ささず、思索に裏付けられぬ行為は、如何に立派に見えても迫力を欠きすぐ崩れてしまう。平凡な行為でも愛に裏付けられると平凡を越えたものになる。愛は人々を素直な気持に落ちつけ、道理に導いて行く。愛を失うとき、人々は意地を張り合い、やせ我慢を通し、屁理窟をこね合うことになる。真理の究明と実践はもとより大切だが、それは常に深い人間愛に根ざしたものでなければならない。そして人間愛は努力と修錬によつて深められるである。

論説

学区制について

受験期になると毎年の如く学区制の問題が起つてくるが今年もまたその受験期がやつて来た。

学区制の混乱は近年ますますその激しさを加えているが学区制の根本精神が教育の機会均等にあるのだから、学区制の乱れが激しくなるにつれてそれに関する一連の問題がクローズアップされてくるのは当然の事である。

学区制の乱れる根本原因を探ると、第一に上級学校進学率、第二にスポーツその他についてのその学校の伝統にあるようである。第一の上級学校進学率は最近特に激しく、数字がそれを明らかに示している。進学率が良いという事は最初には教師がこの方面で良いという事になる。進学率が教師のお蔭で少しでも上ると校区内は勿論、校区外の頭の良い生徒が一斉にその学校に集まる。したがつて受験率は一層上る、というのが現在一流校といわれている学校の歴史である。二については、これはやゝ感情的なものであるから一について話しを進めよう。

進学率のよい学校へ進学したいのは誰しも同じ事であるが、校区内に居ながらも校区外のいわゆる優秀な生徒のために、校区内の学校に行けずいや〳〵ながら校区外の学校へ行かなければならない。この様な矛盾した状態を現実にみながらも当局はこれに対して何等の積極的な打開策をとろうとしていない。のみならずこの傾向を肯定する様な点も多分に見受けられる。

学区制混乱の打開策については学界、その他各方面においても相当考えられている様であるが、次の様な打開策も一応考えられるのではないか。

第一に学区制の徹底、これは改めていう必要もないのである。しかし地方の経済状態が乏しいため、所謂良い学校をもつ都市は校区外の者の入学を認めて、その代償として得られる通学費を一年間の予算の一部として認めている程である。これでは文部省がいくら通達しても無意味な事で、この方面の打開策にも地方財政を豊かにする事が急務である。第二に学校の程度を均等に向上させる事である。ある一校を重視した場合に現在の様なアンバランスな状態が起り得るのである。しかしこの場合方法はいろ〳〵あり、教師の交流という事も一応は考えられるが、これは余程慎重にやらねばなるまい、交流があまり激しくても、学校が常に不安定であり、生徒教師が親しみ難く、結局あぶはちとらずの形になる。があまり遅すぎても進歩がなくなる。これも教師間の事になるが職員幹部に常に清新な空気が流れている事が大切で、この点において職員の交流も必要である。

結局、所謂、古参の中に若さを吹き込む事が最も重要である。以上の様な方法はきわめて消極的な効果の遅いものであろうが、現実を考える時此等の方法も決して消極的なものではあるまい。要は此等の方法をもつて世間の人達に正しい教育の有り方を認識させる事である。

日ソ国交の正常化

最近において世界の人々をアッと言わせた最も大きな政治ニュースと言えば、もはやマレンコフ首相の辞職であり軍人ブルガーニンの首相就任をおいて他にはなかろう。

我々、シロートは、アメリカの政治体制は教えられてもソ連の政治体制は教えられないという一方的な状態にあるので、このような事件が起つても、自ら批判してみる、と云うことが出来にくい。

さて、マレンコフは何故辞職したか。すでに周知のことだろうが「私（マレンコフ）がこのような決定を行つたのは、私が内閣の仕事を、特に農業政策の面で十分成績をあげることが出来なかつたことに対し、個人的な責任を感じたから。」と彼は言つている。しかし、マレンコフのこのイイワケに対して、英国の著名なソ連通であると言われるA・ドイチャー氏は「感傷的な冗談」とみ、さらに「卅年間もスターリンの傍らにあつて、ソ連国家の進路をあやつつて来た人が、ソ連の戦争遂行を指名する三、四名の最高責任者の一人に数えられた男が、政治的、行政的手腕に欠けているとすれば、一体他に誰がそれをもつことが出来るか。」と鋭くその背後にあるものをニラんでいる。

ところで、辞職したマレンコフはどうなるか、ベリヤのこともあつただけに注目されたが、彼は無事、副相の席に納まつた。一九一八年以来ソ連の首相や閣僚で、マレンコフのように辞職を許されたものはなかつたそうで、このことは従来のヤバンなやり方を脱したものと見る向きもあるが、何にしても、血なまぐさい事態を起さなかつたことをソ連のために喜びたい。

ところで、今度の首相が軍人であり、重工業政策の線にそつて国力の増進を計ると言うから、無気味である。何しろ世界の大戦争というやつは十年を周期にやつてくることを忘れないのだから。

こういうときに動き出すのが戦争によつてバク大な利益を上げる連中で、アメリカをペックに〃国土防衛のためには憲法を改悪し、軍備をもたねばならない。〃と挑撥的な宣伝をするようになるかも知れない。この様な事態に直面した場合、我々はどうあるべきであろうか。も一度、歴史をふり返つて見る必要はなかろうか。

この政変の少しばかり前にドムニツキー旋風がまき起り今や世論は鳩山外交、重光外交の二つに分れワキかえつているかのように思えるが、今度の政変によつては、全然支障を招かないことが確実となり、日ソ復交をいい演説のタネにしている代議士志望者諸氏と同じように、我々もホッとした次第である。

ソ連と日本との十才以下の子供が〃両国は戦争状態にあるのだ。〃と聞かされたら、それこそ、マッカーシーでも吹き出すような顔をするだろう。

我々は、早急に、両国の関係が正常化されることを期待するものである。

貴重な体験
石本次郎

今はもう黒ずんだ二本の白線の帽子をかぶつてみると、嫌に貫録ずいたように思えて眞新しい二本の白線を誇りにさえ感じていた入学当時がやたらに懐しくなつて来た。あの頃は何もかもが新しかつたのに反し、今はもうすつかり古参兵のような気がして来て当時の事など色々と思い返してみると、苦笑に似た、それでいて楽しい微笑が起つて来る。

しかし、まだ学生としてもう一つの難関がもう目の前に迫つているのだと思うと全くうんざりする。大学がもし無試験で入学出来るのであればと、そんな馬鹿な考えも起してみるのも、日頃怠けたたゝりが今になつて災いして来たのだと自分を叱ることが度々ある。全くよく遊んだものだ。それでいて、よく会長という重任を形だけでもよく務めて来たものだと、会長であつた自分の姿を思い浮べてみると自分が恥かしい。勿論、私は会長を立派に務めおゝせたのだと言ふのではない。その資格からいつても私が会長などに値しないし、人一倍怠惰な私である。全く信念のない一年であつた。幸い、他の役員の諸君がよく手助けてくれたお蔭で、どうにかその任期をおへたものの、すでに自治会運営に致つては最低の線に到達していたことを感じていた。しかし、どうすることも出来ないあがきに私は取りつかれた。日々重い学校生活だつた。後味も悪い。人の噂話など余り動じない私なのだが、ことと自治会について云々されると、咽喉をしめつけられたような苦しさを憶えた。

もともと、私は何のために蘆高に入つて来たのか、今更再び考えてみなければならない事態に途惑う。二度と自治会運営に携さわらないことを一つの信念として抱いていた私は、辛うじて二年はその信念を保てたものの、結果的にいつて、おめでたい次第だが一昨年の役員の一人におだてられたのが悪かつたのか、またいらぬ勇気をふるい立たせた私が悪いのか、今もつてその判断に苦しんでいる。

とにもかくにも一年の任期を終え卒業するが、一年の体験はやはり貴重だと言わねばならない。多数の人間を動かすことのむずかしさを知り、人を疑うことを知り、そして少しは社会にも接して来たつもりだ。しかし、人の前で話すことが如何にむずかしいかと知らされたことが今も強くやきついている。失敗もやがては笑話になるだろうと、その時を長く待つて居よう。

八十五単位でやうやく卒業出来そうになつたのだが、この単位制の弊害を思い切りよく知らされた三年の生活——或る意味から言つてそれも私にはありがたかつた。卒業式には出席出来そうだから。

それでは在校生の諸君ともお別れしよう。諸君の成長する姿を思い出すと共に、今後の蘆高の成長をも忘れずに居たい。（前自治会長）

投書箱

順調な成績

一月十七日に設置された投書箱（六ケ・執行委員会管理）は、二月二日現在一個しか毀つていない状態である。しかし投書数は総数四十三通を数えている。

二月四日現在の投書箱を通じての投書内容等が二月四日、執行委員会より発表された。

投書箱総数　一個
投書総数　四十三通

これらは質問、要望、批判の三つに大別される。最も多いのは、前号の蘆高新聞或は毎日新聞に関連した出版部へのもので六通。次にそれ等の例を上げると

一、傘に関すること。
一、生徒大会、代議員会に関すること。
一、選挙並びに立会演説会に関すること。
一、校内放送、校内美化に関すること。
一、執行委員会への諸注文
一、生徒申合せ事項徹底についての意見。

学校側に対するものとして

一、うどんの値段についての質問、要望。
一、便所使用について。
一、ロングタイム、ホームルームの有効使用について。
一、好天の日の体操（女子）の講堂使用について。
一、運動場の諸設備（水道部室の増築）設備要望。
一、諸費納入について。

等がある。

尚、此等学校側に対するものは学校側に提出されている。寄せられた投書に対しては、執行委員の討議、検討の結果何等かの処置を講じ、至急の質問、要望に対しては、その解答を校内放送の執行委員会便りで、その統計と内容の発表は蘆高新聞紙上で逐次行われる事になつている。

尚、執行委員会では更に多方面にわたる投書を期待している。

懇談会開かる

本校職員によつて構成される企画委員と代議員会長、出版部幹事を含めた執行委員会との懇談会が一月二十九日土曜日、校長室に於て開かれ、最近の生徒間の様子、今後の政策方針等、二、三の項目について約二時間話し合つた。

書記局員

重久君追加

執行委員会では書記局の充実を計るため、重久公夫君ー一年ーを追加決定した。尚、同君は二月一日をもつて正式に書記局員に加入された。

貸傘

代償金六百七十円に達す

十二月一日以後二月十日現在の貸傘においての代償金及び延滞料は六百七十円に達したこれらの料金は来年度に新しく購入される傘の費用の一部とされる。

出版委員復活

出版部の要望により、かねてから代議員会へ提出されていた出版委員の復活は、二月十八日、生物第二教室において開かれた代議員総会（碓井議長）で可決された。この結果新年度からは組役員の中に出版委員が加わる事になつた。

出版委員＝出版部と各級の連絡を密接にし、級訪問、新聞並びに出版部に対する反響を出版部へ伝達、世論調査の実施等の任務に当り、新聞発行の際直接には関係しない。（各級一名）

訂正

前号、一面、運動部長磯山隆一君は隆治君の誤り。排球部幹事岸本敬二君は藤井孝次郎君（二年）の誤り。数研幹事皆川辰也君は皆川長也君の誤り。

世代の裂け目

李谷舜造

言論の場

まずはじめに前号の記事が描いた多少の波紋について、私は出版部の顧問として一言おことわりしておくことの必要を感じます。そしてあの記事が一つの動機となつて大毎阪神版紙上にも蘆高新聞のことが採り上げられ、学校内外の各方面にいろ〳〵ご心配をかけたことを遺憾に思つています。それは前号の記事が蘆高新聞に現われるまでの過程において、顧問である私に一つの手落ちがあつたからで、これは記事そのものの善悪当否にかゝわらず、その不備をおわびしなければなりません。編集の期間がちようど冬休みにかゝつて、部員との連絡が緊密を欠いたことなど、一々釈明はいたしませんが、私として手落のあつたことを遺憾に思います。その点、大毎の記事の中の、顧問である私の諒解のもとに掲載された云々……という部分の書き方は、真相をうがつたもので、「許可」でもなければ、「確認」でもない、あの場合「諒解」とは言い得て妙でありました。

それから問題の記事についてですが、その採り上げ方に未熟な点があり、見出しと内容との間のズレなどのために内容が必要以上に刺激的なものに受け取られたことなど、技術的に種々至らぬ点のあつたことについて出版部員の方でもいろ〳〵反省を重ねています。何しろ記事そのものはさほど（つまり大毎によつて採り上げられて世間の注目をひくほど）重大なものであつたとは思われないのですが、「蘆高新聞」という蘆高全体の公器のなかで取扱うにしては、すこしなまなましすぎて、その点多分に軽卒のそしりを免れないと思います。しかし要は、部員があの記事で言いたかつたことは、「先生方よ、ぼくたちもまた見ている」という声であつたので、その欠陥は十分反省させるとして、その真意には汲みとつてやるべき面がないではありません。

新聞の編集が三年生の幹事から二年生の新幹事に移つてまだ日の浅いせいかも知れませんが、あの記事が場違いな場所で取扱われたため、必要以上に誇大な見出しを伴つて校内を刺激したのだと思います。元来、二年生は一年生の当時から各H、R、内で文集の編集が盛んで、それにはよく先生方のプロフイールを機知的に戯画化したようなスケッチ風の文があり、それはそれで品位と節度を失しないかぎり、ほおえましいものでしたが、今度の記事もそうした内輪話とかゴシップに類する記事の延長とも見られましよう。もちろんあのなかには、ゴシップというような軽い意味ですまされない本校生としてのプライドといつたような言わば全校的な問題もその中心にあるわけですが、それならそれで一つの問題として提起されるほどの問題意識として内面化の過程を欠いた、まだ問題として十分熟していない程度のもので、さきに私がなま〳〵しすぎると言つたのはこういう意味をさすのであつて、それならああした大上段にふりかぶつたやり方でなく、別なあつかい方をした方が、もつと効果的であつたと思われますし、従つてよけいな雑音を生じないですんだと思われます。いさゝか、にわとりを割くのに牛刀を用いたきらいがあつたと言えましよう。

私はこゝでなにもことさら一応校内で批判検討ずみの問題をことごとしく採り上げて私自身顧問をしている出版部員を鞭打つているのではないのです。こうした軽卒な発言は、われ〳〵教師の側としても、よくありがちな過失なのですから。私は実はこの問題を契機として、もつと一般的な関係を反省してみたいと思つているのです。「言論の自由とその限界」ということがよく言われ、今度の問題も要約すればその点に帰着するように言われましたが、この「限界」とは、いま私のいう「場」と解していゝかと思われます「言論の自由とその限界」という言い方には、なにか「自由」と「限界」とを対立せしめているようなところがあり用いる人によつてそのどつちかへアクセントを置いた用い方がされそうですが、実は個人の基本的人権の一つに認められるべきものとしては、「言論の自由」それ一つであつて、「その限界」とは、個人の自由なる言論を真に効果あらしめるところの「場」の制約と見ていゝのではないでしようか。言うまでもなく、十人の人に話しかけることばと何千人もの群集を前にして話しかけることばとでは、「場」の大小に応ずる声の大小というような量的な適応が必要なだけでなく、当然話し方そのものの質的な配慮が要求されましよう。しかもわれ〳〵の社会生活における種々な「場」の相違は、相手が少数者であるか大衆であるかというような数量的なものだけでなく、人間の社会的関係が織りなす質的な多様性と複雑性とを帯びたものですから、一口に「言論の自由」と言つても、それぞれの「場」にぴつたり応じた真に効果的な言論というものは、なか〳〵至難の業（わざ）と言わなければなりません。生徒の発言に「場」のズレはあつたことは前に述べたとおりですが、それを指導すべきわれ〳〵教師の側にも自戒すべき点がなかつたでしようか。

世代の断層

私が今度の問題で深く反省させられたことは、世代の断層についてです。こういう一般的な問題については、われわれは日常他人事のように傍観的な話題にしていますが、今度の経過をたどつて、結局われ〳〵が直面している大きな問題とは、この現代日本のもつ不幸そのものであるとつくづく感じたことでした。無謀な戦争とその敗戦によつてわれ〳〵の社会にできたこの大きな裂け目は、年を追うてその深刻な様相をあらわしつつあるのではないでしようか。われ〳〵は過去の歴史のなかの挿話として廃仏毀釈の行き過ぎとか鹿鳴館式猿真似とかを笑い話にしますが、あの明治初年と同様あるいはもつと大きな価値の転換や生活意識の変革が、いまわれ〳〵の社会で大きな底流となつて進行しているのではないでしようか。もちろん私は一個の教師として、そういうものを誇大視したり、また自分の指導力の不足をなにもかもそういう社会のせいにして責任を免れようという安易な態度を取ろうとは思いませんが、またこの冷厳な現実から目をそらして、今日の教育があり得るとは思われないのです。私はいままでにも、時としてこの越え難い世代の裂け目に直面して絶望に近い気分に陥ることもありました。しかしこうした絶望から私をいつもよみがえらせてくれるものは、自分たちの生活を通して新しいモラルを摸索しつゝある若い人たちへの信頼感でした。未完成なものはいびつであり、粗野であり、乱雑であつてもそのなかに伸びようとする新しい芽を直視して包容してやりたい、私はそう念願して進んできました。世代の断層はそう短日月に埋めつくせるものではありますまい。われわれには相当な忍耐と真の愛情とが必要かと思われます。

生徒からの一本気な性急な批判に対して、教師であるわれわれもその未熟さをとがめることに性急であつてはならないと思います。生徒の言い分が一方的だとの批評にしても、その緩急よろしきを得ないと、場合によつてはその批評がまた一方的であるということにもなりかねないと思われるのです。生徒の「ぼくたちもまた見ている」といつた類の批判意識のあらわれにはかれらはかれらなりに生徒の立場にしか立てないのだということも諒としてやらねばならぬ場合もあると思います。われ〳〵も同様に教師としての立場を貫かねばならぬ場合も出てくるはずです。

さきほどの世代の裂け目の大きさということと思い合せて、これからも教師対生徒という問題はさま〳〵な面であらわれてくるのではないでしようか。こうしたことが善悪の尺度で単純に割り切れない現実の社会的断層に根ざしている以上、われ〳〵としては生徒とともに同じ問題を悩んでやる以外に、その断層を埋める手はないと思われます。しかし、私は真の愛情とか包容性とかいうものを、放任や甘やかしとははつきり区別しなければならぬし、またしたいと思つています。

一青年の死

語が一転しますが、この一月には、私の心を深く衝撃した一青年の死がありました。これは後で述べるように、本校の出版部とも関係がありますので、触れておきたいと思います。それは本校第六回卒業生（高校としては第三回）宅見嘯海の自殺です。私は校内では、先生方と、かれが自治会功労賞の受賞者であり、自治会名誉会員である関係上現在の執行委員会、の外には話しておりませんが、校内でも一つの話題となつたと見えて、いまだに私の方へぼつぼつ問い合せがあります。

一月二十一日の夜、東京からかれの死を報じた速達を受け取つた時の気持は、言うに言われません。すこし凝つた言い方をすれば、それはベートーベンの第五交響曲の発端のテーマのごとく、私の心をはげしく打ちました。発表された時には非音楽と罵倒され今や世界の音楽の王座を飾る最も美しい宝石の一つに数えられているこの曲のテーマをかつてシントラーが「運命はかく戸をたゝく」と解釈したことはあまりにも有名です。正月の三日に私の陋宅を訪れたかれの姿がまだ記憶にあらたな私にとつて、かれの突然の自殺は、まさに形容することのできない「運命の声」でした。結局においてかれの死は一個の俊敏な性格の鋭利すぎたゆえの破滅だと思いますが、後になつてほゞ明らかになつたところによると、すでに昨年の十二月には書きかけた卒業論文を焼き捨て（かれはこの三月、東大文学部を卒業する予定でした）一切の身のまわりを整理しつくしたかれが、いつもよりもむしろ平静に私と正月の酒をくみかわしていた時には、かれは自ら設定した「十三の階段」に足をかけていたのです。神秘的なことや非合理的なことを信じない私なのですが、——ちようど私とかれとが対座していた時、客の前へ出たがる私のところのことし幼稚園にあがる娘が、部屋の戸をあけて入つてこようとしたので、「階下へ行つてなさい」と私が追い払つたあと、家内が娘に「とうちやんたち二階でなにしてた」と私たちの物静かな応対の様子をたずねますと、娘は何を思つたのか「お話あげてた」と言つたとか、その時は変なことを言うと家内と笑つたものでしたが、結果的に見れば、この時のがんぜない子供のことばが妙な暗合となつて私の心にひつかゝつています。十二月中の書いたと思われるごく事務的な書置きと、一月十六日の死の直前に手帳へ記した五六行の走書き以外に、特に遺書らしいものもなく、かれが中学のころから習慣として書き続けてきた日記も、昨年の十月二十七日からあとは自分で切り取つて処分してしまつてあるので、かれの死のくわしい原因ははつきりつかめませんが、種々の原因が錯雑してかれを死の迷路へ導いたにせよ、そして最後まで他人はもとより、親兄弟にもそれらしいそぶり一つ見せずに非議なほどの冷静さで自ら生の絆を断ち切つたかれの自我の強さ（同時に弱さ）を、強く燃えすぎたためにあまりにも早く燃えつきた炎にたとえるにせよ、かれの死が、この生き難い人生において、特に悩み多い世代に属していたことを悲しく思うのです。かれの死は、本校卒業後四年を経過しようとしている時であり、私に直接の責任があるわけではありませんがかれの死を「運命の声」と聞いて、まず私を痛いほど胸打つたのは、人を教えるということの恐ろしさでした。そして安逸と妥協の多い私の人生と、潔癖すぎたかれの人生とを対比して、こゝにも私は大きな世代の裂け目をまざ〳〵と感じているのです。

うつそみの命死すとも
ひさかたの星と変りて
われらを照らさむ

うつそみはかなしかりけり
芸文の極みもとめて
相戦へども

もちろん歌にも何にもなつてやしませんが、混乱した心で私がやつとかれの霊前にたむけることのできた二首の挽歌です。日ごろ歌などに縁遠い私も、場合が場合なのでこうした古風な発想をとらざるを得なかつたのです。かれの死をめぐる私の感懐をなが〳〵と記しましたが、決して私事を書き連ねたのではありません。これで五十六号を数えるこの蘆高新聞の過去の何号かは、かつてかれの頭脳と才腕とによつて支えられてきたからです。——合掌。默禱。

若人よ急ぐなかれ

先号の記事が大毎に採り上げられてから、出版部に対して数枚の投書があり、私も大体目を通していますが、それに一々答えることは部員はやつておりません。答えないのは、部員がそれを無視したりまた答えられないのではなくそうした生徒諸君の批判を今後十分紙面に生かして答えられると思うからです。たゞ出版部の自治会規約上での地位に関することと、ならびに出版部の運営に関することについては、出版部として早急に検討して明確な方針なり計画なりを明らかにするはずです。その他生徒諸君で、いろ〳〵出版部に対する注文や批判で具体的なものがあれば、投書のような形式でなく、幹事なり部員なりが直接話し合いたいと言つています。

これは投書ではありませんが、私の見たものの範囲で良かつたと思われる三輪亮一君（代議員会々長）の感想を次にあげてみましよう。本人の原稿をそのまゝ掲載できるといゝのですが、本人が直接私に見せたときには、またいずれ校内で発表する機会があろうからと言つて返したのですが、いまその原稿を本人が失つているので、その要領を私が伝えます。主旨はまちがつていないつもりです。

——われ〳〵生徒が自分たちの先生を批判するのは、片方で必ず尊敬の念があるからなので、その場合、批判ではあつても、そこに一種のユーモアがあるはずである。今度の蘆高新聞の記事にはユーモアが欠けている点、自分は残念に思う。たゞ心配なのは、こうした問題が今後蘆高の、自由に物が言えるという良い空気をなくしていくのではないかという事だ。——

この三輪君の意見の後半にある心配というのは、相当多数の人の気持らしく、阪大工学部の大綱真君（第八回生）も、——新聞記事というものは、世間の人が自分の主観で都合のよいように読むものだから、こんどの記事なども、蘆高の事情をよく知らない人は誤解しないとも限らない。自分も卒業生の一人として、できるだけ世間の誤解をとくようにつとめてゆきたい。このころのように何かぎすぎすした利己主義、立身出世主義（学生の気風が逆もどりしそうな世間の風潮を見ると、いつそう自分がいた当時の蘆高のよさというものをなつかしく思う。あゝした空気がしだいになくなつてゆくとすると寂しいことだ——という意味のことを私に語つています。

よきにつけ、あしきにつけ言論というものの持つ大きな力、——あるいはそれは局限すれば活字の威力というべきかも知れませんが——を体験したわれ〳〵は、今後この民主社会建設の武器をふるうことにおいて、いつそう慎重でありたいと思います。学校新聞というような公器を運営するには、特にこの点に留意しなければ、さま〳〵の偏向を起こすことになりがちです。同時にわれ〳〵の指導にも、いつそう多くの努力が払われねばなりますまい。先号の記事に一つの責任を持つている私はもとより、各先生方の有形無形のご協力を必要とします。何か、生徒たちの作つている新聞はこまつたものだというような印象を、多くの先生方の中の一人でも持つていたゞいては困るのです。今後長い時間のうちには、いつも天下太平、四海波穏というふうにはゆかぬと思います。しかも、われ〳〵は良識と冷静とを持して、世代の裂け目から生ずるさま〳〵な風波を乗りきらねばならないでしよう時として厳しく接しなければならぬわれ〳〵ですが、何が敵対的、疎外的批判であり、何が好意的、包容的批判であるかという点については、今の時代に限らず「十代」は特に鋭敏であることに留意したいと思います。

最後にくどいようですが、この文を書いた私の立場を述べておきます。出版部顧問としての立場、そして本校の教師としての立場、あるいはそれ以外に「十代」の「アンファン・テリブル（恐るべき子供たち）」に対しての「哀しき父」の立場など、いろんな立場が重なっています。本校出版部の場合、そして故宅見嘯海の場合、私は結びとして「若人よ、急ぐなかれ」と言いたいのです。（一九五五・二・一七）（出版部顧問）

裏表独語

◇進学、就職、家事卒業後はとそれぞれの道に進むわけだが就職して実社会に出る人はとりわけ頑張つて欲しい。現実の世界の荒波は我々十代と呼ばれるものにとつてあまりにも激しい。

◇毎年の事であるが、今の時期になると実に面白い光景が南館にみられる。就職決定者進学決定者と受験前の各君との対象がそれで、実際に見ないと何とも云えない面白味がある。決定者は最後の高校生活を高校生活三年の間で最も呑気に過し、受験前忙しい異性を捕えて校外散歩と洒落込んでいる。受験前の焦りと、異性との散歩という普通では味わえない気持とが重なり合つて、泣き面に蜂がさした様な顔をして歩いている各君の顔もまた、二月ならではの風景である。

◇別記の如く、一月二十七日に設置した六個の投書箱が約二週間で一個に減つてしまつた。壊し方にもいろ〳〵あるが、拳闘選手の使うサンドバツグの代りにしているのが一番多い。にも拘らず投書の数が量、質とも比較的順調であるのは興味ある結果である

◇書記局員がまた一人増加した。総勢十一人の大世帯である。

◇前執行委員会に比べれば、その活動状態も活潑でありしたがつて人員も多数を要するわけだろうが、ある面からみればやゝ形式に走り過ぎる傾向が無いでもない。現執行委員個々の性質からすれば、この様な結果も考えられないでもないが。

◇三年生の卒業と同時に二年生にとつては最後の一年が始まるわけだが、最後の結果はともかく十三月が欲しくなるのは今から確言しておく。

芦屋会舘

2月23日—3月1日
★姿三四郎
波島 進、高千穂ひづる
星 美智子、植村 謙郎

★月笛日笛
伏見扇太郎、石井 一雄
宇治みさ子、西条 鮎子

★明治一代女
木暮実智代、田崎 潤
相馬千恵子、杉村 春子

3月2日—8日
★春秋あばれ獅子
大友柳太郎、高千穂ひづる
喜多川千鶴、沼田 研二

★月笛日笛（第2部）
伏見扇太郎、石井 一雄
宇治みさ子、西条 鮎子

総天然色映画
★地獄の狼
ヴアージニア・メイヨ
デイル・ロバートスン
ステイヴイ・マクナリイ

・文芸娯楽版巨篇・

三年生担任

わが子を送る

アンケート

三年生を送るにあたって、最も感慨の深いのはなんといっても過去三年間、此等五二〇名の卒業生と共に生活して来られた三年各級担任の先生方であろう。ある時は共に喜び、或る時は共に悲しみ、又或る時は共に楽しまれた諸先生方に対して第三職員室に別記の項目でアンケートを行った。

「項　目」

一、最も嬉しかった事。

二、最も腹の立った事。

三、最も苦しかった事。

四、三年間を一口に云って。

津村進作

一、長い様で全く短かった。

二、沢山あるので、一々気にとめて居れない。

三、秋の遠足などで、平常と異なった高校生らしさを見たとき。

井上淵也

○三年間を一口に云って

一口に云えって無理でしょう。せわしい毎日の連続ですつかり自分が息づく事を忘れていた様です。こんな僕に日記だけが僕の姿を発見するよすがかも知れません。三年間の思い出……。

〃日記帳の記事の中に見出す感傷〃

苦しい事、愉しかった事すべてを感傷として後日楽しく思い出して見ましょう。

○一番苦しかったこと。

つらい、苦しいと思った事は今思い出せません。

○一番腹の立った事。

腹を立てたい事にしていますので。

○一番嬉しかった事

嬉しいと云うより、安心感これでよかったと思う事の連続で毎日毎月すべてが嬉しい愉しかった事でした。私生活では最も充実した三年間でした。

川村淳一

一、一口で表はせと言はれても言葉が浮ばない、そこで日頃の所感を一つ、

蘆高——先づ第一にこれにつきまとうネーム・ヴアリュー（？）を捨て去ることそして一介の高校として出発すること、（これなき言動に空々しさを禁じ得なかったのは小生のみであろうか）、そして誰もが何よりも人間としての実力を重んじ、人間的生長のためにはあらゆる苦難をよく受け取り粘り強い地味な努力を軽視してはならないということ、これなくしては蘆高は永久に不当の優越感と劣等感から脱却し得ないであろうし又蘆高の将来もあり得ないであろう。

最も困った事を書かして頂く

二、屡々女生徒に泣かれたこと、女子とあまり接触することもなく育った小生などにとって全くこれは恐威であった、具体的には言うまい、只心当りの人々よ、あなた方の涙程小生にショックを与えたものはなかった　その歎きは小生の心中深く浸透し小生の人間的成長に大きなプラスとなったことを感謝するにとゞめる

三、特に嬉しかった事と言っても困るが、矢張り三年になって初めてホーム・ルームの生徒と和やかにしつくりゆく事が出来たことであろう、特に記念祭と秋季遠足を絶頂とした二学期の楽しさは小生の忘れ難い思い出となるであろう、尚小数ながら優秀な女生徒に恵まれたことも正直に附記して置かねばなるまい。

本校に来て三年、今度卒業しようとする三年生の諸君と共にひたすらに歩んで来た心算の三年間であるが、卒業を前にして振返って見ると色々の事が思い出される。最初本校に来て目についた事は校舎の汚い事と、生徒が自由でのびのびとしている事であった。

校舎の点は此の三年間に見違える程改善された。自由な点については反って無自覚な生徒を生む結果となり、この点では腹の立つ事も有った。約束を守らなかったり、自分の努力しない事を棚に挙げて暴言を吐く生徒を見掛けることである。しかし出来るだけ感情を表わさないように努めて来たので殆んど忘れてしまったが、その一つに二年生の時に有ったカンニング事件がある。次にあきれる点は学科の選択に於て軽々易きにのみ走る傾向である。上級生から某先生の何科が単位が取り易いと聞けば其の科の人数がふくれる。一体諸君は何をしに高校に来たのかと問いたくなる。高校の教育はあくまでも基礎教育である。進学者は勿論就職者も就職試験の現況から見て基礎学科に力を集中しなければならぬ。基礎さえしっかりしておれば卒業後に其の立場々々に於て応用方面の勉強は出来るのではないか、大きく伸びんとする者には基礎固めが大事だと思ふ。我々は自由こそは自覚に到る最後の道と考えるが、多くの無自覚な者を見て悲しくなり且あきれた。次に苦しかったことは二年生に於て自分のクラスから二名の落第者を出したことである。五十数名の生徒が全員及第して呉れることこそ願はしい事であったが、学校の規定にふれて二名の落第者を出したことは最も大きな苦痛であった。最後に嬉しかったことは野球の優勝は既に旧い事だし、昨年四月に修学旅行で全員無事で再び神戸の埠頭に立った時も嬉しかったが、これも日頃の忙がしさの為に記憶の彼方に霞んでしまった　更に大きな喜びは諸君の努力によって近き将来に与へられん事を祈っている。以上振返って見ると尽きる事もないが平常教壇に立っては学科の性格も有って努めて感情をはさまないようにしている為か、諸君から無神経とか無表情とか云われて来たが、今諸君の卒業を前にして一抹の感傷を禁じ得ないものである。卒業生諸君の前途に多幸なれと祈ってこの稿を終る。

（一九五五・二・五佐伯）

深井卯吉

一、「歳月は流れる」を実感

二、校舎、設備の心なき破損汚損。美化意識、努力の低調。下劣な悪戯。

三、校舎、設備の一応の拡充整備。生徒の明朗、素朴。

神保永夫

一、目まぐるしい一年であった。どんな結果を見るかわからないけど。

二、忙しい最中に生徒が問題をしでかして仕事が渉らなかったとき。お蔭でかんしゃくを起す勉強をしたよ。

三、修学旅行をごり押しに四月にやったことと、生徒がみんな善人と知ったとき。

三木孝幸

一、四頭身美人の靴下（長い様でもね——）

二、腹の立った事を思い出すのはいやなものであるから私に腹を立てさす様な事をした覚えのある人は各自各自で読んで下さい

三、入学当時にくらべると皆んな揃って取敢ず身体だけでも成長したこと（其他のことはしりません）

前嶋雅光

一、三年間を一口に云えば。風にゆれる柳（初めは五里夢中、中程はハリ切ったがだんだんダレて来てウンザリ、今は風の向くままブーラブラ）

二、最も腹の立った事。生徒諸君に腹を立てた事はありません。外に腹を立てること多く、いつも立てたまま、然し、近頃は修養？の甲斐あり陰にコモって、雑言には無用と相成りました。

三、最も嬉しかった事。小学校教師の際「二十四の瞳」の様に、病気で長欠中の小生を見舞いに、生徒全員が三里の道を歩いてやって来てくれた事。中学教師の際、家庭貧困で長欠の女生徒を世話して登校させる様にしたことがあるが、其の子が遠足の時古封筒に取った虫クイ豌豆をオヤツに持って来て私に半分くれたのを泣き笑いの思いで、食べた事、等です。

アルバイト一日八百円なり

長野県白馬高校

この地方は冬になると全く雪のカーテンに閉ざされ、吹雪の激しさもまた一しおで、二、三日も見通しのきかない日が続く事もある。積雪も平地で一メートル——二メートルもあり、このような日の朝などは鼻の先も凍ってしまいそうだ。この様な状態だから活動も制限されてくるわけであるが、しかし暖い地方の人々の羨望であり、我々に与えられた唯一のウインタースポーツがある。いわずと知れたスキーである、冬休みは勿論、少しの休みにもスキー場に出かける。煙を上げてすべる気持は、暖い地方の人々がいくら想像をたくましくしてもそれを越えるものだと思っている。暖地の人々がスキーに来るが、時間を制限されて名残り惜しそうに帰っていく姿に我々は雪国に住む、という誇りを感じると同時に、彼等は気の毒だと思う。

こゝ白馬高校はアルプス連峰白馬山のふもとにあり、白一色の雄大な日本アルプスを仰ぎながら春を待つのである吹雪の時等、この日本アルプスの山々が襲いかゝって来てその巨大な姿の前にうつぶされる様な気がする。

暖地と違いこの地方は冬休みが長く、アルバイトも趣きを異にしている。アルバイトには此等眼前にそびえる山々へ食料品や燃料を背負い上げる。すべて背に負って輸送するのだから、その量においても微々たるものであるが、雪の山を十貫目もある荷物を背負って登るのはなみたいての仕事ではない。馴れゝばこれも楽しいもので、冬休みの楽しみの一つである。が……。朝の七時頃登り始めて目的地に着くのは一〜二時頃で、六時間も要するのだが、帰りは二時間半位で下れる。勿論日帰りで、八百円〜千円位の収入となる。都会人には真似の出来ない重労働であるが、一日、二百円—三百円で働く阪神間のアルバイトに比べて、決して高給取りとは云えない様である。

話を自治会の方に移そう。白馬高校の自治会組織を表に表わしてみよう。

—学芸課……—生物部、物理部
　　　　　　　ダンス、演劇
　　　　　　—文学、社研部
　　　　　　—農業部、写真部、山岳部、等
—庶務課……—生活部、図書部
　　　　　　—その他
—体育課……—スキー部、バスケット部、バレー部、野球部
　　　　　　—その他

この他に会計、代議員、書記等があるが、本校とは余り変りはない。学芸課、体育課は個人の希望の部へ入るが庶務課は各級二名の選出制がとられている。特にスキー部の存在は大きく、県下にもその名は知られ、冬期国体には毎年五〜六名の選手を送り出している。

所在地＝長野県北安曇郡北城村

（以上の原稿資料及び写真同校新聞部提供による）

【写真説明】写真は白馬高校舎から（白馬山南方千メートル）写す　向って右が白馬山、中央が杓子岳　左が鑓が岳 [illegible]

新聞交換校

一五〇校に達す

一号毎に発展を続ける蘆高新聞は、その交換校も一号毎に増えている。最近新しく交換を希望してくる学校を合せると一五〇校を越える状態である。本校としても此等他校との交換を一部でも多く行いたいのであるが現在では一号につき、百〜百十部までに制限されており、非常に残念な事である。発刊号数五十号以上は大阪の池田高校、その他わずかである。以下は主要交換校である。

神戸高校　社高校
滝野高校、滝野実業
相生工業、姫路西高校
市立伊丹高校、関西学院
神戸女学院、蘆屋女
神戸商業高校、東神戸高校
琴丘高校、夢野台高校
市立姫路高校、報徳高校
市立尼崎高校、親和学園
森学園、飾磨高校
県立尼崎高校、成徳学園
篠山高校、新居浜東高校
白馬高校、淡路農業
御崎工業、成東高校
三池高校、有馬高校
八鹿高校、中津東高校
旭川東高校、旭川北高校
八戸高校、川西高校
阿部野高校、福崎高校
橋本高校、源上高校
長浜高校、紫野学園高校
草津高校、郡山高校
朱雀学園高校、東舞鶴高校
須紫丘高校、福岡中央高校
小倉高校、中津高校
甲南高校、鹿児島高校
済々黌高校、佐世保北高校
宮崎大淀高校
松山北高校、宇和島南高校
小富士高校、穴吹高校
小豆島高校、観音寺第二高
香川高校
門司東高校、高水高校
森陽第一高校、本郷高校
松陰高校、半田高校
稲沢高校、長野商業高校
飯田長姫高校、下伊那農業高
浜松商業高校、狭北高校
東海高校、静岡商業高校
都留高校、浜名高校
三島北高校、赤穂高校
横山商業高校、静岡女子商業
板橋高校、第三商業高校
早稲田実業、千葉工業高校
横浜翠嵐高校、浦和第一女子
開成学園高校、安房第一高校
野田高校、水戸農業高校
多古高校、太田高校
栃木高校、朴沢女子高校
本宮高校、五所川原高校
函館西高校、函館東高校
旭川北高校、旭川北高校
出雲高校、八幡中央高校
羽生実業高校、小倉工業高校
三木高校、尼崎高校
勝山高校、九州女学院
由良育英高校、夙川学院高校
阿部高校、府立園部高校
糸島高校、桜井高校
郡山高校、三女高校
海南学園高校、府立島上高校

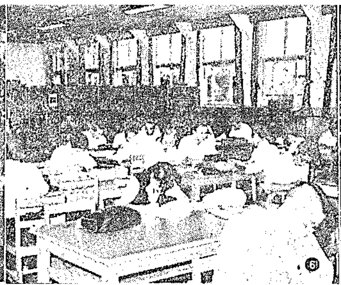
英語科　（創立以来四年…………今や独自の伝統を打ちたてた教授法…………）
受験の英語　初・中・高級　（テレプレコーダー使用）
貿易英語　——外人指導——　中村賢二郎先生指導

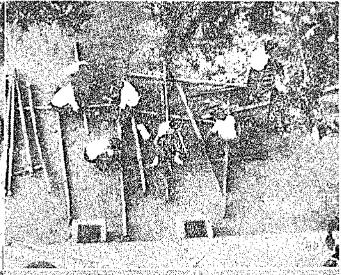
公認学校　立聖館英語学院

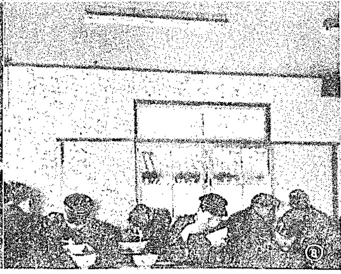
タイプ科　英文　和文　四ケ月にて卒業免状授与　（速成科は二ケ月にて卒業免状授与）
珠算科　一流教授陣
阪急西宮北口駅東へ20米

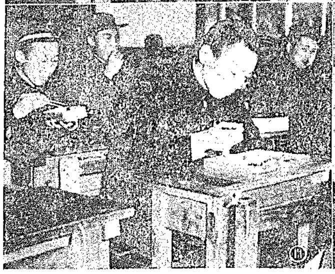
一年間の絵日誌

期日10月2日—10日
六回芦高記念









【写真説明】

1　記念祭（十月二日—一週間）芦高生徒の情熱の結晶、第六回記念祭。

2　硬式野球部、全国大会出場成らず。（七月）三年連続甲子園出場を目指して、連日練習に励んだだが、新鋭住友工高に六—三で破れ、甲子園出場の夢破る。

3　サッカー部、宿敵関学を破り王座へ。（阪神間新人大会）

4　校内排球大会（六月二十八日）

5　山岳部活躍のシーズン。（七月）、夏休みは山岳部活躍のシーズン。高山植物の咲き乱れる日本アルプス……。

6　三学期ともなれば、図書館も定員過剰。

7　記念祭の準備（九月）

8　記念祭と共に開かれた食堂、連日満員の盛況。

9　うどんの影響によりさびれたとはいえ、お好み焼のシーズン来る。

10　うどんにより前途多難を思わせたパンもなかなか

11　十月は食欲の秋。弁当も風味が増してくる。

映画

後半に厚味

山本有三「女の一生」

此の作品は明治、大正、昭和の三代にわたる時代の変遷をバックとした山本有三の「女の一生」の映画化で、文壇勢力の強い日本の作品であるだけに、文芸色豊かではあるがその反面「映画的」な表現法によつてストーリー、ひいてはモンタージュの均衡を見事に保たせている。そして各時代を通じて、苛酷な運命の三十年を真実一路に強く生きぬこうとする一つの女人像を監督中村登はリアリズム精神をもつて追求して歯切れの良い演出を行つている。

初恋の人には叛かれ、信頼に供えた歓びの日の夢にはやぶれ、やつと幸福な家庭を持つたと思うと、思想に目ざめ「赤」に走つた息子に家出され、あい次いで夫に死なれて唯一人路傍の石となつた女性—要はその女性の生活の中に何を描くかと云ふ大規模なテーマーを日本映画独得の繊細的な描写態度で仕上げているのは、其処に中村登の人生観なり、人生解剖なりが存在していると私は観る。

前半は娘として、後半は母として此の世に生命の冠をきせられ、唯一人ますら女の旅路を強烈な迄も個性的な淡島千景の演技は見ごたえがある。此れは特に後半において強く表はれ、二時間半の大作を持つて余さず見事に演じている。

映画が芸術を構成している多くの要素を含んでいるだけに色々な所の表現に夫々の効果的な機能を働かせなければならないが、此の映画に於ける撮影、脚色、音楽は効果的である。

前半の活発な生活にはカメラの動きに流動性を持たし、後半のおちついた生活に於いてはカメラの動きをコントロールしている。元来、日本映画のテンポがのろい事は一つの特徴であるが、此れを特徴と見ずに、唯単に生活感覚のテンポの相違である等と解釈しかたづけられては困つたもので、自然に即した日本の芸術の特色であると見るのが妥当であろう。水木洋子の脚色は一切の会話の無駄を此の映画から排除して簡潔な心理描写を行つているし、黛敏郎の音楽による効果も満点である。

此れまでに一女性の生涯に真向から取り組んで此れ程成功した日本映画はなかつた。そして女人哀詞を強調しておりながら女の立場を健全に描いている所は此の映画の最大の取り柄であろう。とかく母物になりかねない様な物語をそちらに走らせなかつた事は原作の持つ精神を監督は把握していたと云える。然し概念的な描写に終つたのは少々残念であつた。作品全体としては前半よりむしろ後半の方がヴオリユウムがあり波の様にうちよせる感動は、生きとし生けるものを感動させずにはおかないだろう。

＝映研部提供＝

今年の流感は生命を落すとまで云われております。関西でも休校する学校が多くなつてまいりました。入学試験の前や期末試験の前にてこじれた風邪にとりつかれたら大変です。その予防と治療には万全を期さねばなりません。それには信用ある薬局へ御相談になる事が第一です。

医薬品
医薬器具
大洋薬局
国道芦屋川東詰

春組 生徒募集

編物
手編　本科　六ケ月（火・木・土）
卒業証書授与
機械編　資格　高等学校卒業生

御料理
実用家庭料理
誰方でも入れます（水）

さくら織
二十教室終了者に教師免状が出ます（金）

手芸
誰方でも入れます

兵庫県認可　芦屋編物技芸学院
宇賀泰子
芦屋市精道町四四（芦高西の筋角）
電芦屋五〇九二番
◎（学則あります）

個人教授

一、科目　英語（和訳、英文法、英訳）
数学（解Ⅰ、幾何、解Ⅱ）
◎指導者各科別（一科目の選択自由）
一、若干名募集（高一、二、三の何れの学年でも自由）
希望者は左記宛問合わせること
神戸市東灘区本山町岡本宝蔵廿五
増田方
小野礼年

サッカー部宿望成る
関学を破り王座へ

一月三十日から二月四日までの六日間に亘って摂丹地区予選大会が行なわれ、甲陽高校を一〇対〇、伊丹高校を六対〇、準決勝で市立西宮を延長戦の末三対二で破り決勝戦において、昨年の西日本大会で破れた関学を一対〇で雪辱し宿望の王座についた。以下は本校で行なわれた決勝戦の結果である。

蘆高1（0―0／1―0）0関学

（評）午後三時半蘆屋のキックオフでスタートし前半五分五分のまゝ進められ時々打つ関学のロングシュートは蘆高のゴールをおびやかしたが、宋、佐野のデイフエンスよく得点をゆるさず前半を終った後半蘆屋の出足よくじりじりと関学を圧到し、李、河村のコンビもよく後半十分LH李のロングシュートはよく風にのりキーパーの頭上を越え先取点をあげた。この時両校ナインは総立ち、シュートされたボールを見送るといったユーモアあるプレイがみられた。それ以後は全く蘆屋の一人相撲で、あせり気味になった関学をそのまゝ押し切った。（M）

書道部

第六回全国競書大会が十一月三十日、東京都玄友会主催で開催され、本校出品作品の中二入賞、一入選の成績を収めた。

金賞、山尾征男
銅賞、柄谷利之
入選、堀本邦雄

阪神間高等学校書初展並びに

阪神間小中高校書初展は一月十五、六日本校講堂において行われた。（主催、兵庫県書道学会及び阪神高校書道部連盟）

学校賞（団体賞）
第一位　本校
連盟賞　太田圭一
〃　柄谷利之
〃　山尾征男
朝日新聞社賞　岡田孝一
その他特選、秀作多数

尚、現在徳島県羽ノ浦書道会鳴門市端硯書道会にそれぞれ五点、九点を出品中である。

善戦及ばず
阪神高校柔道大会

一月二十六日、尼崎道場に於て、阪神地区高連新人柔道大会が行われたが、各校の代表数十名が得意の〃技〃を競い観覧者も百数十名を数え盛大を極めた。なお、成績は次の通り。

団体戦（第一試合は省略）
第二試合（対報徳高校）
井川　足払〇野中（初）
〇吉田　合技　藤原
大和　引分　足集利（初）
桑田　内股〇木元（初）
臼谷（初）引分　紙谷（初）
金村　背負投〇篠岡
松山（初）引分　小瀬（初）
1対3

個人戦
第一戦
〇松山（初）背負落　鯉谷
第二戦
松山（初）袈裟固〇木元（初）

（評）団体第一戦は問題なかったが、第二戦の対報徳戦はまず正直に云って相手が悪かったと云えよう。報徳は有段者五名を擁する強力メンバーであったから、極めて不利な条件の下にある本校柔道部が一対三にまでもち込んだのは善戦と言えよう。

一勝は、二年吉田（商）君が挙げたが、これは同君の敏ショウな動きと、機をみて〃技〃をかける早攻法が成功したものと云える。

期待された初段の松山(2)臼谷(2)の両君は、いずれも強豪に相対して、白熱の戦いを、場内一ペイに展開したが、巧みな相手の作戦に、勝敗を決するところなく引分けにのとされた。

尚、個人戦には、松山（初）君が出場、第一戦は、甲陽高の鯉谷を、得意の背負落しで一蹴したが、第二戦に於て、寝技をもって鳴る報徳、木元の前に削し、優勝の宿望を達し得なかった。

もし、〃蘆高に柔道場があったら、指導者が居たなら〃

フランス美術展を観る

二月九日水曜日、フランス美術展見学が行われた。この日は約千名の生徒が見学し、見学しないものは休校であった。

すなわち午前九時十五台のバスに分乗し、途中バスガールの美声を聞きながら、同十一時過ぎに京都着、十二時過ぎに入館、それぞれにフランス美術を味わった。後、青蓮院に向い、院内を見学した後午後六時過ぎ帰宿した。尚、最初予定されていた石清水八幡宮見学は折からの雨と時間に余裕がなかったため取止めとなった。

美術展を見て
中川孝治

我々大望の「フランス美術展」見学の日は、朝からくもりがちな日であった。二月九日朝九時学校からバスを連ねて一路展覧会場である、京都美術館へ向け出発した。

フランス美術展は中世から近世までのフランス美術の変遷のあとをたどるのに最適のものであると思う。

出陳品目は、ルーブル美術館のものを中心にフランス各種の美術館から集められたもので、油画、版画、デッサン、彫刻織物、ステンドグラス手写本、など三百六十余点という広範囲にわたっている。バスが会場の前につき下車してさっそく会場へ入った。

中は大変な人で一方を見て他方を見ようとすれば、人をよりわけて元へもどらねばならぬほどの混雑ぶりであった。

第一室には色々あったが作品番号一二七番の石碑がおもしろく感じた（中西先生が行く道バスの中でおじぞうさんのようなものだとおっしゃったがほんとうにそのような感じがした）三つの面に人や動物が浮堀にしてあった、人においされて次の室へ入ったそこにはキリストの磔刑像があった、油絵でよいと感じたのはヴーエ作「水の上のガラテア」ルナン作「農夫たちの食事」シャンペニュー作「合掌する女児の肖像」デボルト作「駝鳥」モニエ作「児に乳をふくませる若い母親の肖像」アングル作「アルジエリックの習作」クールベ作「狙われる鹿」などである。特に「水の上のガラテア」は近代的色彩にみちあふれた作品であると感じた。又「児に乳をふくませる若い母親の肖像」で母親のきている服をさわれば、ごわごわという音がしそうであり又子供のさくら色のあしなどただ美しさに感心するばかりであった。彫刻では沢山あったがどれもあの小さい作品の中にあれだけの鮮が現はれている所などやはり本場のものであると思った。（水彩やデッサンでは、作者未詳の「ある若い婦人の肖像」は実に美しかった、鉛筆であれまでかけるのかとただおどろくばかりであった。ステンドグラスは特有の色で大変美しかった。織物の室の中で音楽をききながら立っていると宮殿内の雰囲気にひたっている様な感じがした。

その他民芸の中に「歯付の自在」というのがあった、あれは日本でいえばいろりの上につるすものだろうと思う。のこぎりの歯のようにしてあって一段づつさげていくようにしてあった。一通り見終り、会場から霧雨が降っている庭へ出ると、今までのはりつめていた緊張が一度にとけた様な気がした。雨降る中をバスまで歩きバスの中で食事を済ませて近くの青蓮院を拝観した後、バスは一路芦屋へ向かって帰還の路についた。展覧会場を通じての感じは、行くまでに色々なパンフレット、解説書で見ていた一部の作品がこのように小さな作品かとおどろく作品が沢山あった。このことは結局作品の偉大さを物語るものであると思う。又たいていの絵が宗教に関係があり、これらの作品を真に理解するにはやはり宗教的知識が必要である。と思ったフランスの絵を直接見ることが出来、約半日世界的作品の中にひたっていた事は大へん勉強になったと思う。（美術部）

透視
規律を守ろう

フランス美術展見学の日、入館する前に蘆高生に対してのみ何故あれだけ強い注意があったのだろうか。その直接の原因は別として、遠因は最近の学校における日常生活にあると思う。実際、あの時は本校が恥さらしにあった様なものだった。

最近の本校生徒の生活状態はあまりにも堕落し過ぎている。その最も端的に表われているのが風紀、つまり服装の面である。特に女子は甚しい。本校とて全くの放任ではない。原則は紺か黒になっている筈であるのに、紺や黒を着ているのは時代遅れのように思って先を争って派手な服装をしたがる。オーバーのえりは立てないといけない位に思っている人間も居る。中学校の時は地味な格好でいたのが高校に入ると世界が一転した様な勢で派手になる。注意すると自由でしょ、と答える。これでは執行委員がいくら手を打ったって無理な話で全く手のつけようが無い。本校は生徒を放任するために自由を与えているのではない、という事位判っていてもよかろうと思う。この様な結果からいろいろと束縛を受ける様になっても致し方があるまい。折角こゝまで築いて来た自治の階段を崩してしまうにはあまりにも惜ない事ではないか。

男子にしたって、派手な傾向が特に強くなって来た。彼の手袋に普通の給料取りならの手の届きそうもない高級なオーバー。決して止めろ、というのではない。もう少し自分の現在の立場を自覚して頂き度い。自治会で活躍していた者がよくもまあ、あれで自治会の役員だなんて大きな顔をしておられたものだと思う位簡単に校規を無視している。敢て質素にする必要はない事は認めるが、自分の現在の地位以上の事をするのはどうかと思う。ましてそれを誇りのように思っている人間が居るのだから……。

我々は学校側からどんな事にせよ束縛は受け度くない。それには我々生徒の一人々々が考え直し束縛を受けない様な行動をしなくてはならない卒業だからといって派手にする必要は毛頭ない筈だ。いわば時、所、位の関係をもっと強く、深く理解しなければなるまい。（二年・H）

映研部

洋画第一位に
〃山河遥かなり〃

昭和二十九年度は日本に於ける映画界の一大転換期であったと云える。洋画ではシネマスコープ、ヴイスタヴイジョンの進出によって大スクリーン時代に入った。

一方邦画では「七人の侍」「山椒太夫」のヴエニス国際映画祭の受賞は吾が国の映画界に活気を与えたし、色彩システム・イーストマンカラーは飛躍的に発達し、やっと生産の軌道にのった感を呈した。そして今その芸術的代表作「地獄門」は米国アカデミー色彩映画賞並びに最優秀映画賞の有力な候補として上げられている。

映画研究部では昨年度の洋邦画作品の中から優秀作品の選定にあたり、「優秀映画選出審議会」を催した。選出の基準を映画の芸術性に求め、慎重に審議した結果、次の如く決定した。

洋画の部
第一位「山河遥かなり」
二位「第十七捕虜収容所」
三位「ロミオとジュリエット」
四位「恐怖の報酬」
五位「波止場」
六位「陽気なドンカミロ「
七位「モダンタイムス」
八位「素晴しき哉人生「
九位「聖衣」
十位「私は告白する」

邦画の部
第一位「廿四の瞳」
二位「山椒太夫」
三位「七人の侍」
四位「此の広い空の何処かで」
五位「近松物語」
六位「千姫」
七位「足摺岬」
八位「忠臣蔵」
九位「にごりえ」
十位「地獄門」

送別会行わる

例年の行事の一つとなっている自治会主催の三年生を送る送別会が二月八日火曜日、午後一時四十分より本校講堂において、二、一年も多数の参加のもとに開かれ、午後五時盛会裡に終了した。

工、経が圧倒的
大学受験希望調査

本年度大学受験希望者は約五〇名、その内、官公立へ三五〇名、私立へ三九〇名が志望している。その内容はやはり土地がらからいって、大阪大学、神戸大学、神戸商大、関西学院が圧倒的であり、学部の方も―今日の社会状態からみて経済か工科を出ていないと……―と一般によく云われている通り本校でも、受験者全部といってよい程が経済学部、工学部を志望している。以下は主な大学と学部。

東京大（文類一、理類一）
京都大（文類三、理類二）
大阪大（経十三、工十九）
神戸大（経十七、工十二）
大阪市大（経五、理工十一）、神戸商大（四十二）
神戸外大（三十）、大阪外大（二十）、早大（政経十三、商十二、法十二）、慶応（八）、関西学院大（八十四）、関西大（二十一）で他に、一橋大（二）、横浜大（二）お茶の水（一）津田塾大（一）浪速大（二十八）、大阪学芸大（二十五）、甲南大（二十一）、明治大（七）神戸女子薬大（十一）神戸女学院（八）防衛大（三）等。

一月中頃に行われた同志社大学第一次試験合格者は次の通り。

同志社大学　清水良晋（経）
広谷八郎（経）
武庫短大　瀬谷昭枝（家）
関西大学　林　孝昭（経）
国田義昭（法）
堀江実行（商）
清水三郎（経）
立命館大学　植村昌治（税）

スキー旅行行わる

恒例のスキー講習会が、今年も一月二十九、三十日の両日神鍋山で行われた。

二十九日（土）伊東、忍那両付添の先生以下、多数の先生方、生徒四十二名は午後三時半、バスで神鍋山へ向け本校を出発同夜到着した。翌三十日（日）は幸い快晴で絶好のスキー日和に全員終日大いにスキーを楽しむ事が出来、同日夜行、帰還した。

欄外トピック

帽子はいずこ

君の名を問えど答えぬ数寄屋橋

東京での話、帽子をかぶっていない生徒が一斉に詰問された。某君答えて曰く「カビが生えています」又、曰く「去年の暮クズ屋に売りました」又曰く「去日の大掃除に使いました」。

下駄ばき論

「下駄ばきは衛生上よろしからぬ故……」という某高校の規則をいくら頭をひねっても学術的に理解出来ぬと一生徒が補導課主事に伺いをたてたところ、主事答えて「下駄ばきではガラ〱と響きが大きいから耳の鼓膜の振動が激しくなり、耳の衛生上よろしく御座いません」だと。

本で調べよ

生徒の質問に対して恐る先生をよくみかけるが、これもその話の一つ。との先生、質問に対しては必ず「本で調べよ」だそうである。そこで生徒が黒板に先生の悪口を大きく書いた。ところが、これをみつけた当先生カン〱になって「誰が書いた！」生徒一斉に答う「本で調べよ」

高校生の位置は

某高では高校生の社会的地位について次の様に発表している。

「未成年者なり」―警察
「学生です」―映画館
「ティーンエージャーなり」―映画会社
「大人だ」―国鉄
「子供じゃ」―父親
「半人前だ」―会社
「一人前ですよ」―母親
「立派な御客様です」―食堂
「人間です」―学生

「真　実」

東京都K高校で国語の時間に俳諧を作らせ、ベストテンを決定した。とにその二首を上げる。

ナンバー・1
三年を四年で卒す良い男

三学期ともなれば―

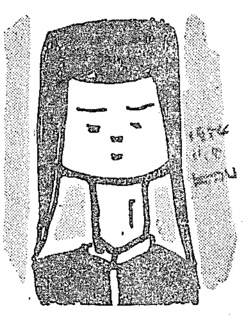
某教室の一角、三人の男が集って何やらヒソ〱。
A「おい、何倍だった？」
B「四倍半。」
C「オレのところは五倍だった。」
A「そうか……。」
しばし、沈痛な空気が流れる。たまりかねた立ちぎきのD子さん
D「一体どこの大学？」
C「なあに、便所の競争率さ。」

栄枯盛衰

昨年十月に出来上った本校及び夜間部の生徒のための食堂はいつ行っても、押すな〱のセイ況ぶり。なかには授業をサボッてツル〱やっているのも困るが、この食堂故に「サツパリアカンようになりました。」のが附近のお好み焼屋。「以前は、ようきてもらいましたのに――。一つ何とかしまへんと。」と嘆げくオカミさんに、すかさず「では、新聞に広告をのせまし上う」と出た新聞部の商コンも仲々堂に入ったものである。

風邪
医薬品・有名化粧品
センター薬局
本通り商店街　TEL. 5568

味自慢！
◎お好み焼
◎アイスクリーム
若林
蘆館北側



え・中川幸治

私の一年間

永井　清

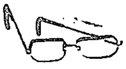
一年を振り返って私の感じたまゝを私を中心に率直に書いてみよう。先ず私が最も痛切に感じた事は部の活躍する〃場〃の問題である。放送部は自治会書記外局にあって自治会のサービス機関であると同時に学校全体から見て一つの学校の施設である。これは同じ図書部に於ても云える事であるが、我々が活動する場合の三つの立場即ち我々自身の自立的活動の場又、自治会のサービス機関としての場合、及び一般学校関係の放送方針、この二者をうまく歩調を合せなければならない。

具体的な例を見ると、古い話で誠に恐縮だが過去に於て放送部が自治会員諸氏に対してどの様な放送内容を希望するかと云う調査をした事がある。その結果、第一位に軽音楽ジャズポピュラーと云う結果が出た。そしてこの意見を反映する事は自治会員諸氏に対するサービスであると同時に我々放送部員としての自立的活動でもあった。そこでこの結果を放送部企画課で充分吟味した上放送番組に軽音楽プロを盛る事になった。所が果せるかな学校側から学内に於ける軽音楽の放送はまだしもジャズ等の放送はさしひかえるべきであるとの一線が強く打ち出されてしまった。そこで我々は放送内容を充分吟味した上でなるべく激調のないジャズなり軽音楽を放送すると云う事で一応解決させたのであるがしかしこゝで考へてみなければならない事は自治会員の意見としては、圧倒的に軽音楽ジャズをと云う意見が多かった事である。

又もう一つ感じた事をのべると、はっきり云って放送部ほど割の悪い部は少ないと云う事である。つまり放送部の仕事はまともに万事がスムースに行ってあたり前となる。例へば校庭での生徒会、或いは文化祭、体育会、とう云った時の放送設備は実に複雑なものとなり、この設備を維持する事は、容易な事ではないたゞでさえ使い古した放送線路に機械を使って故障が多いのに、そこえ加えて、放送線はふみちぎられ、時にはごていねいにナイフで切ってショートさしてあった事もあった。ところがこの故障を発見するとなると、とんでもないやゝこしい事になる。五十近くの教室への配線及び十数本にのぼる放送線を一本一本見てまわっては日が暮れてしまう一方マイクがうまく働かないとなると放送部はなにをしているると来るしやっとなおったら生徒会が終っていたと云う事も何度か記憶している。

自分が仕事をしている時はさほどつらくも感じなかったが、今一、二年生の部員が一生懸命機械をとり組、故障を修理しているのを見ると、例へその技術がまずく経験が浅いとしても、どうしてその不手際をしかる事が出来ようか。それだけに、自分が何もせずにほっておいて放送がスムースに行った時、その時の嬉しさは何に例へようもない。放送部とともに生きて来た私のみが感じ得る喜びであろう。

（今年度放送部幹事）



私は「神の庭には万人の席が用意されている」と書かれているのを読んだ覚えがある。これは神の庭では賢人も愚人も何の差別もない自由な世界のことであるらしい。しかし現実の社会を見ると、これとは大変な相違がある。よい例が映画館の中で空いた席を取ろうとして互いに争っているし、二十七日に行なわれる選挙においても然り、今度から選挙法改正がなされ、現在まではそれ程大きな問題は起っていないが、かつては卑劣な手段でもって代議士の席を競ったものだ。これでは神の庭には……も秩序もあったものではない。では前おきはこのぐらいにして「競争と秩序」について少々触れて見たい。

人類の進歩は一に競争によるとも云える。しかしその競争は競争のための競争である利己心にからわれてはいけない。では競争とはいったい何だろうか。それはある限定されたものを秩序を乱してまでも獲得しようとする人間の利害関係が衝突した時に生じるものであってこの点から云うとどうも現実の社会には超越した競争が行なわれているにすぎないようである。競争には必ずねたみとからみが生じるものである。実際に入学試験に落第したため一生徒が学校に火を放った事件があった。競争に負けても絶対に劣等感を持ってはならない。これは我々の試験に於てもいえる。

しかし秩序にも必ず外部からの圧迫がある。早い話が現在の日本である。日本は真の独立を見たのではなく外部からの圧迫により一応の形が造られたのにすぎないようだ。話が遠くへ飛んだようだが、日本人はもっと諸外国に対してねたみとからみでもよいから競争意欲を持ちたいものである。（M）

校歌を唱って

Aさんへの手紙

Aさん卒業お芽出度う。目前に控えた大学のことや、就職される人には、社会のこと等で頭の中が一杯で、ぴつたりこないかもしれませんね。しかし、入試も終り、気持に整理が出来れば、はじめて、卒業したのだと云う淋しさを感じられることでしょう。卒業の時の母校への愛着と、せきばくとした感慨には実際やりきれないものがありますね。

今日は卒業祝いの代りに、僕の京都行楽に感じたことをお伝えします。

先日一月十五日、僕は二日間の連休を、何か有意義に使い度いものだと思い、九時頃弁当と地図とスケッチブックを手にして、国鉄に乗りました。丁度成人の日だったせいでしょうか、幾つてはいましたが、行楽客が割合多く見られました。

成人の日と言えば、Aさんは、どの様にすごされましたか？外へ出る時学校の遠足では、多勢でゾロゾロと歩くでしょう？だけど、今度は一人だったせいか、全く自由で時間を自分のものにした計画が出来ました。

京都駅からバスで嵐山まで行き、雪解け道を苔寺へ歩きました。やはり京都だという感じですね、雪が山や屋根を白く澄っていて……。苔寺は西芳寺というのが本当らしいです。連日の受験勉強で疲れているでしょうが、一度気ばらしに、あの雰囲気の中へとけこんでみるのも良いだろうと思います。薬など飲むより良いですよ。

若い人達が案外沢山行っています。ほとんどが二十代の所謂若い世代の人達です。数人の青年が七十余りのおばあさんとつれだっていかにも楽しそうに、庭園を散歩していました。本当に平和そのものでした。僕がどうしてこんなこと書くか、おわかりでしょうね？。寺は大和、庭は京都と言います。今度は二人で出かけませんか、亀井勝一郎さんの大和古寺風物誌でも持って……。

話がそれましたが、その青年達は皆二十前後の様でした。おばあさんが、何度も、くりかえし「今日はよう連れて来てくれはった」と、若い人達に礼をいっていました。美しい光景でしたよ。苔寺の門までつゞく築地のところに、〃禅寺の苔を啄む小鳥かな〃という歌碑が立っています。

帰りに茶店で甘酒を飲みましたが、茶店の雰囲気がよくマッチしていました。

苔寺から天龍寺への道で不愉快な目に会いました。雪解けで、水たまりの出来た道を高級車が遠慮ようしゃもなくどろをはねかけていきます。人一倍感じやすい僕のことですから、腹がたってなりません。車の中でふんぞりかえっている奴の顔に、つばでもひっかけてやり度い程でした。それが、すぐに階級意識に飛躍します。実際、日本程金持にとって住みやすい国はないでしょうね、反対のことも言えます。貧乏人の住みにくい国日本です。結局、大きく言えば、歴史は、階級闘争のくり返しに過ぎないのでしょうがそういう、どろをかけるものと、かけられるもの、そんな矛盾や、不正に一番強く憤りをもつのは、若い人を於ては無いでしょうね。僕達の持っている若さということ、この上ない宝です。学校の図書館に、〃君らこそ日本を〃という本があります。若い世代へ少々哲学的になりますが、わかりやすく書いてあります。一度読まれたら良いと思います。他人の褌で相撲をとるようですが、僕の卒業を祝う言葉の代りにして下さい。

実際、大人とか年老り、もちろん、全てではありませんが、腹のたつ奴が多いですね。その腹のたつ者の類に入るような奴が、代議士でございと、いばっているんですからね……。僕がいつも感じることは、無理なこと、道理にあわないことでも易々諾々と、あまんじて受入れる。そんな人でも、僕達の様に、学生時代、若い時代には義憤も感じ、悪を論じたであろうに、いつの間にか、年ましたら全々無関心になってほしくありません。

龍安寺の石庭を見ました。何かありますね、それが何かはわかりませんが……。皆ぢつと、縁に座って見ていました。わかった様な顔をして、ほこら顔に説明している人も居ました。僕には、とてもこつけいでした。夕暮の龍安寺を出て街に出ると（電車で、四条大宮まで帰りました）まるで別世界です。パチンコの音と、自動車の騒音が、気狂いじみた交響曲を聴かせてくれました。

日本人が一年間に、パチンコに費す金が、八百億円だそうです。それに比べて、書籍の購入に費すのが三十億、文部省の科学研究費が十二億円と本で読みました。情け無い話です。実際、目の色変えて玉の行方を追っている大衆には、平和とか、自由とかいったところで、こちらが一人相撲をとっている様な気がしてたまらない気持になります。国民が、直径一糎程の鉄の玉に血まなこになっている間に同じ玉でも、ゴルフの玉を追う種属の人間に、うまくやられていることを思えば、じつとしてはいられません。

今に火薬の入った玉を体の中にぶちこまれる様になるかもしれませんね。

余り長くなるのでこの辺でペンを擱きます。とにかく、良い一日でした。こうして書いていても、目に浮びます。

もうすぐ選挙がありますね。Aさん、こんな場合どうしますか、今どうしても金が必要である、ところが全然アルバイトの口がない、たゞ選挙運動のアルバイトで、Aさんの最も、軽べつしている保守系の候補だけが、やとってやると言っている。もちろん報酬は多い。ところが思想的にも人格的にも共鳴出来ない。

こんなに極端な場合でなくても、とにかくこんな場合どうしますか？

イデオロギーはイデオロギー、金は金と、割切ることが出来ますか？

これからは、Aさんも、いろいろの問題にぶつかることとをとるにつれて、ひくつになってしまう。僕はそんな人達の中に、未来の自分の姿を見る様な気持がして、時々、自分への嫌悪の情をおさえることが出来なくなります。

Aさん、せめて、僕達は、今の若い世代の人達はどんな世の中になっても――僕達がこれからの社会を創るのですが――、悪は悪、不正は不正として、負けないようにしたいものです。

話を元に戻します。苔寺から、天龍寺、太奏の広隆寺へ行きました。広隆寺には、国宝の弥勒ぼさつがあります。僕は去年の夏休み、先生やクラスの人達と大和へ行きましたが、その時、中宮寺でも同じ仏像を見ました。僕は、広隆寺のものの方が好きです。Aさんはどうですか？

〃仁和寺の僧〃で有名な御室、仁和寺へ行き、そこから龍安寺まで歩きました。

お坊さんが、鉢をかぶってとれなくなった話、そんなエピソードを知っていて寺を見れば、又別の味があります。良い所でした。仁和寺の境内で遊んでいた子供に「毎日こんな所に住めてイイだろう？」と聞くと、「一寸も良いことない。皆よく来るけど何が良いのかわからない」と言っていました。もちろん京都弁です。僕の質問も少々野ぼかったのですが、環境に馴れるということ――おそろしいことですね。マヒしてしまうと言うか、自分の周囲がわからなくなります。そこでAさんにお願いがあります。今も書きました様に、僕達は自分の周囲がわかっている様でわかりません。中学を出て、蘆高へ入った時には、色々のことに気がつきました。あゝもしてほしい、こうもしてほしい、こゝは悪い……と、ところが、いつの間にか、無感覚になることが、よくありますね。Aさんが学校を出られて蘆高を客観視出来るようになれば、そういう点、多く気ずかれることでしょう。良いところも、悪い所も、そんな事を教えてほしいと思います。そういう意味でも、卒業なされでしょうが、どうか、学生時代の純潔な心を失わないようにして下さい。

むつかしいことでしょうが……。いつかAさんは、母高に対して「何もせずに卒業する、自分がなさけ無い」となげいていましたね。僕はそんなこと心配する必要はないと思います。

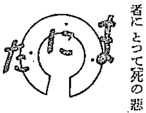
どうか、胸を張って、力一杯校歌を唱って卒業して下さい。

又、いつか会いましょう。Aさんは僕等の先輩ですからね。それではさようなら。

卒業をされるAさんへ

児玉　勝也

二月二十六日



◇裏があれば表がある様に、宇宙のあらゆるものは、相対する二つのものからなっている。

◇人間は喜びを知る、と同時に悲しみをも知る。生と死、このように永久に交点の無い矛盾、（矛盾に交点の無いのは当り前であるが）の中に我々は生命を宿している。

◇しかし生の喜びのみを知る者にとって死の悲しみは不可解なものであろうし、死の悲しみのみしか知らない者にとって生の喜びは一つの謎であろう。この両者間の対立、即ち生と死の間、こゝに生と死の谷間があるのである。

◇生と死の谷間、我々の現在の如何なる空想力をもってしても、おそらく解決はつくまい。ところがその例が日本中到る処で発見出来るのである勿論、この例は日本に限ったことではないが……。

◇生活力、生活意欲を失った生物がそれである。実際、彼等にとって喜びの世界は未知であり、と同時に死の世界へは憧れ且つ恐れと不安を抱いているのである。死への恐れ不安のために日々を、食い継いでいるに過ぎないのであって、死へ誘いかけられゝば、何等の抵抗をも示さず、むしろ好意的な気持でもってそれに従うのが彼等である。

◇死に応ずる、これはとりもなおさず死を善とみたことを意味し、結果は自殺となって表われる、生の善を知る者はそこに生活欲があり、それに伴う労働を惜しまない。

◇しかし死を善とみるにしろ悪とみるにしろ、その本質は今後とも想像の限界を越えないで欲しいものだ。仮にその本質が見究められたとしたらそれが善にしろ悪にしろ決して好ましい状態は来るまい。理由、それは読者の想像に任せよう。しかし現実の社会において、日本国力の中心層たる下層階級になればなる程、死を善とみる傾向が強くなる事実は最近の実例をみても確かである。

第八号

「芦笛」発刊！

二月二十六日

編集後記

◇三年生にとって最後の「蘆高新聞」となるので、いろいろと計画したが、蘆笛の編集と重なるなどあってどうにかこうにかこゝまで仕上げたわけだ。

◇最近、他校から寄せられる新聞と比較して、本校の新聞が内容でも形式でも決して劣っていないと自負している。内容の点では高校新聞としてはかなり高度なものであると思う。これは単なるうぬぼれではない。それにはそれで正当な根拠があるからである。

◇本号は当初四面の計画で居たが、蘆笛の方に余裕が出来たので、こゝに増頁となったわけである。

◇先号での事もあるので、今号を編集するにあたっては相当神経質になった。相手が毎日じゃ少し具合が悪い。たとえとりあげられたのが阪神版であったにしろ、その後の内部的動揺をみる時、我々としても圧迫を感ぜずには居れなかった。

◇しかし今後も我々は、批判的立場にたつという基本方針は変えない。

◇出版部に女子の入部をみた。蘆高出版部始って以来おそらく始めての事だと思う。彼女達が動き出すと蘆高新聞もかなり色合が変らぬとも限らない。

◇一昨年の出版部が実際には三人だったので、それから考えると、一年生だけでも十分に新聞を編集し得るという事になる。二年生としても安心だ。

出版部員募集

○希望者は何時でも執行委員会室へ

出版部

うどんより合理的
岡田のお好み焼